

## ラウンドテーブル：フェミニズムの継承<sup>1</sup>

青野篤子<sup>2</sup> 岩本一貴<sup>3</sup> 谷元絢子<sup>4</sup> 阿部純<sup>5</sup> 松井久子<sup>6</sup>

(<sup>2</sup>心理学科 <sup>3</sup>シネマモード <sup>4</sup>ホッとる一むふくやま <sup>5</sup>メディア情報文化学科  
<sup>6</sup>エッセン・コミュニケーションズ)

第一著者は、この間、男女平等意識の継承というテーマで、母親世代から娘世代への男女平等意識や男女平等観の継承を質的・量的アプローチにより研究している。第二波フェミニズムを経験した世代は、女性の自立と社会進出をめざし自らの生き方を模索したが、1980年代の均等法世代、1990年代の男女共同参画世代と、徐々にフェミニズムへの親和性を失っていったと言われている。しかしながら、近年はまた、「女子会」に象徴されるように、女性が集い、経験を共有し、女性が置かれた状況をかえていこうという風潮が生まれている。このラウンドテーブルは、フェミニストの生き方を描いた記録映画「何を怖れる」の上映に合わせて企画され、フェミニズムの継承についてさまざまな角度から議論した。本稿はその報告である。

【キーワード フェミニズム フェミニスト ウィメンズ・リブ 男女平等】

### はじめに（企画趣旨）

では、映画でお疲れのところですが、ラウンドテーブルを開催させていただきます。私の方から企画の趣旨を簡単に説明させていただきます。私はこの3年ほど科研費をいただき、フェミニズムの継承というテーマで研究しています。福山でフェミニストの生きざまを描いた「何を怖れる」という映画が上映されたのを機に、映画の上映にかかわった人たちが映画をつくられた松井監督とともに、このテーマを掘り下げてみたいと思って企画しました。映画というのは実にインパクトがあるものですが、研究を社会に発信するのは難しいものです。研究で得られた知見ときょうのお話との接点が見つかることを期待しています。

話題提供の第一人者は、映画館のディレクターであり映画史研究会を主宰なさっている岩本一貴さんです。フェミニズムやミソジニーが映画にどのように反映されているのかを映画史の立場からお話いただきます。お二人目として、まさに映画の登場人物たちと同時代に青春期を過ごされた谷元絢子さんに、ウーマンリブとは何だったのかということについてお話いただきます。続いて、ポスト・フェミニズム世代の阿部純さんには、前後の世代と比べて自分たちの世代はどのような世代であり、何をめざしているのか、また専門のメディア文化論の立場から、フェミニズム継承のツールとしてジンの可能性についてお話いただこうと思っています。私は、母親世代から娘世代への男女平等意識の継承性について、自身の研究を紹介させていただきます。松井久子さんには、これらの話題提供を受けて、率直な感想やコメントをちょうだいしたいと思います。ではよろしく願いいたします。

## 映画にみるミソジニー（岩本一貴）

私はシネマモードという映画館でディレクターの仕事をしてながら、およそ2カ月に一回程度「映画史勉強会」を行っています。毎回10名～15名ほどの参加があります。この研究会は、映画というものが、前の時代の映画のどういった影響を受け、また後の時代の映画にどのような影響を与えたかということと、映画には、その時代の政治・経済・ジェンダーなどがどのように反映されているのかという2つを中心に、映画の社会的背景を視野に入れて映画の歴史を体系化することを目的としています。

このラウンドテーブルのテーマは「フェミニズム」ですが、私は映画におけるミソジニーに注目します。これは映画史的にはかなり重要な意味をもっていると思われます。映画での女性の描き方や女性の役割は、その時代の社会背景やジェンダーを如実に反映しています。そこで、フェミニズム運動が起こる前の時代の映画で女性がどのように描かれていたかを、現代の映画と比較しつつ、ミソジニーの観点からみると、社会における女性の立場や人々の意識の変化が（あるいは人々の深層心理のように変わらない面も）よくわかると思います。

ミソジニーを映画史的に検討する場合に、エポックメイキングな位置を占める一連の映画があります。それは、1940年代前半～1950年代にかけてアメリカで流行した犯罪映画で、一説には『マルタの鷹』（1941）から『黒い罌』（1957）までと言われていますが、いわゆる「フィルム・ノワール」です。この呼び方は、1946年にアメリカ映画が公開されるようになって、フランスの映画評論家のニーノ・フランクが名づけたと言われていますが、映画の呼び方自体に社会背景の影響があることがわかります。ドイツ占領下のフランスではアメリカ映画を観ることはできなかったため、戦後になって、それらを観たフランスの映画評論家によって再評価されたわけです。

フィルム・ノワールは「暗い映画」「黒い映画」とも呼ばれるように、コントラストを強調した映像（『カリガリ博士』（1920）に代表されるドイツ表現主義のサイレントの時代に出現した影やコントラストを強調する技法）や、静寂を破る特異な音響などにより、犯罪や心の闇を描きだすところに大きな特徴がありますが、これには、やはり1930年代に台頭したナチズムと戦争の影響をみることができます。多くの映画にかかわる人間もアメリカに亡命し、ハリウッドで仕事をするようになりました。ビリー・ワイルダー監督もその一人で、『失われた週末』（1945）という映画は、幻覚におびえるアルコール中毒の男の恐怖と苦悩を描いたもので、製作者の予想に反して大ヒットとなります。

フィルム・ノワールの源流はフリッツ・ラングの『M』（1931）にさかのぼると言われています。この映画は、ドイツで実際にあった連続殺人事件を題材にした、少女ばかりを襲う猟奇殺人の犯人を追う内容で、トーキーですがBGMがまったくありません。だからこそ、殺人鬼が口ずさむペール・ギュント組曲の「山の魔王の宮殿」が恐怖をそそります。また、街で遊ぶ子どもたちの群れに覆いかぶさる黒い影、料理に手がつけられていない食卓、長方形の

らせん階段、人の形をして空に舞い上がる風船など、少女の「不在」を表象するものが巧みに使われています。当時のドイツ映画の技法は完成度が非常に高いと思います。

フィルム・ノワールに共通しているのは、登場人物が、職業倫理もしくは人格面で墮落していたり破綻を来しており（もしくはそれを悪化させて行く）、登場人物相互間での裏切りや無慈悲な仕打ち・支配欲などが描かれ、それに伴う殺人、主人公の破滅がしばしば映画のストーリーの核となっていることです。このような暗い映画が流行した背景には、復員兵たちのPDSが影響していると言えるかもしれません。心を病んだ復員兵たちは、精神の荒廃した主人公に感情移入したのではないのでしょうか。

もう一つの特徴は、男を墮落させる女性「ファム・ファタール」が登場することです。実はここに、当時の映画に顕著なミソジニーを見出すことができます。「ファム・ファタール」とは、文字通りに訳せば男性にとっての「運命の女」という意味ですが、男を破滅させる「魔性の女」という意味もあります。おそらく、これは男性にとっての女性の二面性を表しており、女性が社会の中で背負わされた役割の二面性をも表すものでしょう。ときに女性はいたわるべき弱い女であったり、依存する母であったり、近づきたい聖女であったり、性愛の対象であったりと、精神的には女性に支配される男性がいます。その裏返しとして、男性には女性に対する畏怖や嫌悪といったものが生じるとされます。それがミソジニーです。

フィルム・ノワールが作られたのは、第二次大戦前後に当たり、若い男性の出征にともなう労働力の不足により、女性の社会進出がいやおうなく進んだ時代です。女性は経済的にも力を得て男性に対峙するようになったのです。戦争から戻った復員兵たちは身も心も傷つき女性に癒されたいと願うのですが、女性はすでに家庭外に自分の居場所を見つけていたわけです。男性の女性へのアンビバレントな感情が、男性が主な作り手であった当時の映画に投影されたのはよく理解できることです。女性は「ファム・ファタール」となって映画に登場し、男を誘惑し、男を犯罪に巻き込み、破滅させ、そしてしばしば殺されるのです。

50年代後半は時代が大きく変わっていきませんが、それがまた映画に反映されていきます。女性の描き方も大きく変わっていくようになりますが、それはまたの機会に譲りたいと思います。

### リブが私に残したもの（谷元絢子）

テーマを与えられ、この一カ月の間、考えて、考えて、混乱の極みに陥り、さらに「何を怖れる」の映画（DVDではなく）を見て、自分の経験をいかに伝えるべきかという迷いも出てきています。ただ、やはり自分は自分という気持ちでお話ししようと思います。

私は、1967年に生まれ育った福山を離れ、東京で大学生活を始めました。子どもの時から福山は閉鎖的で、とても生きづらく感じていたので、とにかくこの町を出たいという一心でした。都会の東京には、この街と違う何かがあるだろうと、無茶クチャな期待をもって東京

に生まれました。当時は「政治の季節」と呼ばれ、デモと集会が当たり前のようにあふれていました。私も、実際に中身はよくわからないまま日米安保反対運動に引き込まれていきました。運動というものがもつ力はすごいものです。いりつくような熱さの中で、私たちは、枠にはめられるのではなく、枠をはずすこと、歴史は自分たちで変えていく、そんな力がみなぎってくる、確かにそんな風を感じました。しかし、体制の力は大きすぎました。また学生運動の中にも性による役割分業が存在する・・・その事にも違和感がありました。

そんな折、女性解放を叫ぶグループが様々に誕生、女性自身が変わることでは社会は変わらないと主張し、多くの女性の共感を得ました。私自身、1970年10月に、田中美津さん率いる「グループ闘うおんな」の黒旗に出会った衝撃は今でも忘れられません。多くの女性のグループが生まれました。そして、「リブ新宿センター」が設立されたのです。ここは一種の女性の駆け込み寺の役割を果たし、中絶や避妊などの相談センターとしても機能しました。リベレーション (liberation) は女性を社会の規範から解放放つ《解放》であり、また自分らしくいきる (リヴ live) 《生きる》の2つの意味があると私は解釈しています。女性たちは、女らしさや女の幸せといった埋め込まれたものから解放され、自分に向き合い、自己変革を通じて社会変革をめざしたのです。

まもなく私は、個人的な事情で富山に移り住むこととなります。そこでおんなたちと生きることを模索しました。東京だけでなく地方でリブが生まれていたのです。声をかけて集まってくれた女性たちは、皆、主婦的状況＝働きながら子育てすることのたいへんさ (今も変わりません) を抱え、それを何とかしたいと必死でした。自分らしく生きたい、本音で生きたい、語りたい、という思いを共有できたところで「めんどり会議」という女たちのネットワークをつくりました。そして、育てる場と働く場を共同で創る試みから共同保育とお弁当の仕出しの共同経営を始めました。

活動を記録するために、そして社会に発信するために、「わたしを生きる女たち」というミニコミも発行しました。参加してくる一人ひとりのこだわりをいろんな角度から表現していくこと、本音で生きたい、一人ではできないがつながることで見えてくる様々なことを綴ったものです。「戸籍・婚姻制度の呪縛を解け」、「おんなにとって仕事とは?」、「雇用機会均等法の課題」、「台所からの報告～本当の豊かさを求めて」など、今読み返すと、やはり女たちは女であることを否定せず (そこから逃げることなく)、「産む性」に向き合い、命の大切さを手放すことなく、いろんな活動をしてきたのだな、と胸が熱くなるのを禁じえません。また、このミニコミからもわかるように、当時のリブの運動は、アジアの女性たちとの連帯をも視野に入れたものでした。

女性問題を考えると政治とかかわらざるを得ません。「働き」「育て」「闘う」ことはつながっているのです。経済的理由による中絶は禁止し、障害者は産ませまいとする優生保護法の改悪に向けては全国各地で運動が起こっていましたが、私たちも、仕事が終わった週末に東

京の集会に参加し、また週明けから仕事をするというようなこともありました。児童扶養手当の切り下げの反対運動にもかかわりました。

生活者だからこそ見えてくる政治の矛盾、女だからこそ見えてくる社会の矛盾、これが今も続く女性の運動の原点なのではないでしょうか。「めんどり会議」の真骨頂は何と言っても、学習会の後の果てしないおしゃべり会でした。自分を解き放つきっかけを掴める場を皆が求めていたのです。

1993年に福山に帰郷することになりました。まったく新しい環境と言ってもよいところで自分としても新しい仲間との出会いと自分との出会いがありました。当時私は、女性が遭遇するもっとも困難な問題であるDVに目を向けざるを得ないと思っており、これに賛同してくれる女性たちと、DVシェルター「ホッとる一むふくやま」を立ち上げることになりました。これはいずれNPO法人となります。女性に対する暴力はもっとも過酷な性差別・女性抑圧です。これに苦しむ女性が後を絶たないということは、女性に従属的な地位を強いる社会構造に決定的な問題があるということです。DVの本質は、言うことを聞かない女を黙らせるという、ジェンダー格差を背景に相手を思い通りに支配することです。女性が力を得てこの支配の構造から抜け出るためには、やはり女性同士の連帯というものが必要になってきます。

最後に、「リブがわたしに残したもの」は何だったのか、「おんな」は「おんなたち」の力になれる。競争を強いられても、つながることへの希望をなくさないようにしよう。いつだって変わることはできる。傷ついてぼろぼろになっても変わることができると信じたい。

### 世代のはざまを感じること（阿部純）

私は今33歳で、いろんな意味で「適齢期」を課せられている世代です。私はとくにジェンダーを専門的に研究しているわけではなく、メディア研究の分野に属しています。また、メディアといっても、お墓の研究が中心です。しかし、きょうの「フェミニズムの継承」というテーマは、まさに私にふさわしいとも思っています。まず、たとえば結婚はしたもの、子どもをつくるべきかどうかなど、自分のなかでいろいろな疑問が生じてきており、女性であることやジェンダーの問題を意識せざるを得ないという状況があります。また、お墓の研究をやっているのも、個人の記憶をどのように残すかという意味合いもありますし、家制度の問題もあります。そのような点では、フェミニズムの継承と相通じるものがあると感じます。

『何を怖れる』の中でも女性たちが伝える手段としてたくさんのミニコミを作ったことを紹介していました。ふだんは伝えたくても伝えきれていない何かを共有したいというときに、人はこのようなメディアに託すのでしょうか。今、若い人たちの間で「ジン」をつくる動きがあり、これが私のもう一つの研究対象となってきています。このことから、フェミニズムの

継承は、今の私にぴったりのテーマと言えます。

私は東京の郊外の団地で育ちました。母親が専業主婦の典型的な家族で、中学生の頃からこの「帝国」から抜け出したいと思っていました。学区を超えて高校に通い、大学・大学院も関東圏の大学でした。大学時代にはジェンダーにはまったく興味がありませんでした。だから上野千鶴子さんの社会学も受けていません。今考えると、受けてみればよかったですね。

福山に来て結婚して、家族や職場との関係なども出てきて、ジェンダーにしたいに関心をもつようになりました。ゼミ生でお墓を研究したい人はあまりいませんが、メディアやジェンダーにはかなり関心があるようで、たとえば、若者の結婚観と婚活について調べる学生や、テレビアニメにおける性的な表現について調べる学生などがいます。心理学科の青野ゼミと合同で月に1回程度「ジェンダー・ゼミ」を開催して、活動の記録を紙媒体（フリーペーパー）で残すようにしています。

私自身、ミニコミを作るのは好きで、以前からお墓のことなどをミニコミで発信してきました。尾道に来て、自分たちのメディアを作りたいという人たちと出会い、主にアーティストレジデンスの活動とタイアップしてジン（zine）を作り始めました。作ったもの、考えたこと、調べたこと、しゃべったこと、好きなことを何らかの記録に残す、つまりドキュメンテーションという意味合いが強いかもしれません。

紙に記録することは、いろいろな呼び方をされています。ミニコミ、フリーペーパーと呼び方もありますが、私たちが自分で発行しているものはジンと呼んでいます。ウーマンリブの時代にはミニコミと呼ばれていたのでしょうか。同人誌やコミケにもつながるものがあると思います。つまり、好きなものを好きなだけ発信するということは同じです。江戸時代にはお墓好きの人たちがいわゆる同人誌を作っていたので、今私がお墓の研究ができるのです。

ネット時代になって紙媒体が廃れてきたのかと思いきや、そうではないようです。「personal is political」ということばがありますが、ジンを作る人たちはそういう信念もっていて、やはり個人的な経験を社会に発信する手段を必要としているわけです。また、「Desktop Publishing, DTP」の発展が追い風になっていると言えます。つまり、私たちは今、パソコン1台で出版できてしまいます。とても安価で、コンビニのコピー機も駆使しながらwebと違う質感をもった自分のメディアをもてるわけです。また、人が集まるカフェなどに全国から集めたジンを展示するなどして、自分たちで流通経路をつくることもジン・カルチャーの特徴と言えます。90年代くらいから、小さい紙物が小さく流通するようになったこともあり、最近ではジンというメディアを見直していこうという動きがあります。

ジェンダーやフェミニズムに関して言えば、若い女性たちがフェミニズムへの思いや自らの体験をつづったジンが見られます。アリスン・ピープマイヤーは著書『ガール・ジン 「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』の中で、「フェミニズムの焦点は、生殖権の保持や企業での性差別と戦うことだ」という人にとっては、ガール・ジンは『本物の』フェ

ミニズムとして認められるには軽すぎるかもしれない」としながらも、「もし私がこういうことを書かないでいたら、ほかの誰かも書きはしないだろうから」と述べ、若い人たちの暮らしの中でフェミニズムがいかにか表現されているかを説いています。ガール・ジンはその意味で興味深いと言えるでしょう。

フェミニズムの変遷については諸説あるようですが、ガール・ジンは第三波フェミニズムの一端を担うものとも見られます。『何を怖れる』が描いたウーマンリブは第二波フェミニズムの時代を代表する運動でした。それは、世の中を変えようとするアクティビストの運動でした。ガール・ジンの登場は、今、新たなフェミニズムの形が現れていることを示唆しています。第二波フェミニズム（リブ）の時代のミニコミと今のジンとどのように違うのか読み比べることでフェミニズムの変遷を考察することができるのではないのでしょうか。また、おもしろいことに、男性のジンが遅ればせに登場してきています。これも何らかの意味があるのだと思います。ジンを通して人々の意識の変化を知ることができるし、今紙メディアが見直されている時代性というものも改めて考えてみたいと思っています。

### 母から娘への継承（青野篤子）

私の専門は心理学ですが、映画と比べると心理学の研究は味気なく、インパクトの弱いものに思えます。が、フェミニズムの継承という意味では、松井さんの映画と私の研究に何か接点があるのではないかという気もしています。

私は1953年生まれで、大学に入ったときはまだ学生運動がくすぶっていて、先輩たちの活動を横目で見っていました。体制批判はすごいことなのですが、学生運動を経ても大学の中の性差別はなくなりませんでした。男性学生の活動を支えるために夜はホステスのアルバイトをする女性学生もいました。大学院に進学しても、就職やドクターコースへの進学は圧倒的に男性有利な時代でした。

最初から、心理学の中でもとりわけ社会心理学に興味がありました。しかし、大学ではすべての分野を学ぶ必要もあり、敬遠したいような内容にも出会いました。心理学は人間の研究ですが、人間＝男性であり、男性のための男性による学問のような印象を強くもちました。フェミニズムに「かぶれた」私は、心理学を斜に構えてながめるようになりました。

心理学をやめて社会学に転向した方がよかったかもしれませんが、心理学の中から心理学を見直すという作業をずっとやってきたこととなります。今関心をもっているのが、なぜ男女平等が実現しないのかということです。日々接している学生さんたちは、男女差があまりなくてさほど差別的という印象をもちません。しかし、ジェンダーギャップ指数といった客観的指標では日本の男女平等はきわめて遅れていて、世論調査でも性別分業に賛成する人の比率が高くなっているということです。男女平等は世代から世代へと継承されないのでしょうか。

そこで、男女平等意識の継承というテーマで、母親（世代）と娘（世代）の意識を比較するような研究をここ数年行っています。きょうは、その一端をお話したいと思います。

まず、私たちがどのような時代を生きてきたのかを考えるにあたり、フェミニズムの変遷をたどっておく必要があります。1960年代後半からのウイメンズ・リベレーション（ウーマン・リブ）は第二波フェミニズムとも呼ばれますが、男性優位社会を変えていくための「運動」に力点が置かれました。その後フェミニズムは「思想」的に成熟していきます。1990年代は揺り戻し（バックラッシュ）が起こり、ジェダー・フリーへのバッシングが強まりました。今はポスト・フェミニズムと呼ばれ、フェミニズムは下火になった印象もありますが、若い人たちが自分の感覚を大事にしたり、「女子会」と称して女性が集うところはリブとの共通性があるという指摘もなされています。

男女平等意識の継承は、教育・メディアなどの公的なルートと、人から人へという私的なルートがあります。母親は社会的な役割を担っていると同時に一人の母親でもあり、公的ルートと私的ルートの両面で影響を及ぼしています。公的なルートと私的なルートの中間に「世間」が横たわっていて、母親にも娘にも影響を及ぼしています。

ヤフー知恵袋で「男女平等」について投稿された記事を見ると、母親の立場や娘の立場からの意見をとらえることができます。質問ということではなく、皆さんどう思いますか？と共感を求める内容が多いようです。母親には、建て前では男女平等を認めつつも、本音のところ娘に女らしさや女性の幸せを期待する傾向があります。娘は、そういった母親世代の保守性に反感をもっています。これらに対するヤフー知恵袋の回答がいわば「世間」の意見になるわけですが、母親のアンビバレントな態度をたしなめ、娘のいらだちをなだめる役割を果たしているようです。世間や素人というものは、実に中庸の徳を示しているのです。

統計が語ることより、直接女性の声に耳を傾けるような研究をしてみたいと思っています。そこで、母親と娘にインタビューして、相互の影響をTEM図（複線径路等至性モデル）に書いて分析するようなこともしています。女性大学生とその母親にインタビューをしたところ、もちろん経験は個々に異なりますが、男女平等意識の継承にはいくつかのパターンがあるようです。まず、高校進学や大学進学の時点で、進路を自分で決めたいか親の希望や周りの影響を受けたかで自律と他律に分かれ、現時点での将来設計において仕事を優先するか家庭を優先するかに分かれていました。女性大学生の多くが仕事も家庭もという両立を希望していますが、自律的な選択をした人は仕事優先の方向に進む傾向が強いことがわかりました。しかし、大学進学は自分で決めたいが、将来設計は家庭優先という人もいます。娘の将来設計には母親のさまざまな影響が見られます。娘が自律的で仕事優先の考えをもっている場合、母親は娘の話に耳を傾け、自身は働く女性のロールモデルになっているようでした。

個々の母と娘との関係を見ると、男女平等意識の継承がより複雑で個性的であることがわかってきます。たとえば、インタビューした女性学生の一人は水族館のトレーナーをめざし



ていました。動物をかわいがる母親を見て、娘も子どものころから動物が好きで、シャチのトレーナーになりたいと思うようになりました。しかし、勉強はあまり好きでなかったそうです。夢を抱きつつ、そのときどきで挫折しそうになる娘に母親はずっと励まし、寄り添い（夢を共有し）続けました。就職活動の時期になり（インタビューはこの時に行われた）、倍率の高い水族館だけでなく一般就職も視野に入れるようにという父親の強い勧めもあり、母と娘は強い葛藤を感じるようになっていました。母親が娘を応援し続けることは、結果として娘の選択肢を狭めることになるのではないかという気持ちも表明されました。私は TEM 図で、母親の応援は抑制的な力として示しました。ところが、次のインタビューでは、娘はある水族館に就職を決めていました。母親も娘もたいへん喜んでいました。結果的に、母親の応援は娘の自立を促進したということになるのかもしれませんが。

他に、フェミニストの母親とその娘さんにインタビューして、母と娘の人生経路を重ねて TEM 図に書いて、相互の影響過程をみるというようなことを行っています。スライドにもいくつかその例を紹介しました。これらはまだ母と娘の人生経路を並べて書いただけなので、その絡み合いが図に表せたらいいなと思っています。また、ただインタビュー（interview）して TEM 図を書いて終わりではなく、これを研究参加者にフィードバックすることにより、相互の見方を融合させることができ（trans-view）、研究者は自身の解釈を振りかえる（reflect）ことができ、参加者は自分の人生を振りかえることができます。そういう意味では研究が少し実践に近づいてきたかなとも思っています。

最後に、研究からわかったことをまとめてみます。第一に、母親の影響は、ロールモデルか反面教師かという単純なものではないということ、つまり、娘の個性や娘との関係性によって屈折して現れると考えられます。第二に、母親の共感的・支持的な態度が娘の自律を促進すると言えます。第三に、フェミニストの母親は男女平等の考え方を教えるというより自身の生き方を通して娘に男女平等を伝えているようです。第三に、フェミニストの母親は、自分の課題・社会の課題に立ち向かうことから、相対的に娘への期待が小さいということです。第四に、フェミニストの母親は人生において多くの選択を行っており、それが娘の選択を促しているように思います。そして最後ですが、フェミニストは必ずしもフェミニストを自認していないということです。

## 指定討論（松井久子）

ほぼ同世代の谷元さんのお話は同感できる内容が多かったのですが、他の方のお話は目新しく、とても新鮮に感じました。それぞれの話題提供について簡単にコメントさせていただきます。

岩本さんのお話は、社会背景が映画に影響しているという観点から、終戦直後のアメリカ映画の一つの流れであるフィルム・ノワールについての分析でした。フィルム・ノワールの

作品には悪女が登場し、確かにそれはミソジニーの反映でもあるでしょうが、もうひとつに、監督が男性だからと言えるのではないのでしょうか。女性の監督は当時も今も非常に少ないのですが、もし、当時の社会を女性監督が映画で描いたらどうだったのでしょうか。女性が映画監督として映画をつくることには特別の意味があります。女性主人公のキャラクターや心の叫びを同性の視点で表現し、伝えることができると思うからです。最近の若い女性監督の中には、女性監督と言われるのを好まない人がいます。そういう人はとくに女性主人公を描くことにこだわりません。それはえてして男性目線と変わらない映画と言えます。女も映画をつくる時代になって、つくるという行為にもジェンダーがどのようにかわるのか、映画をみる際にも、また映画史を学ぶ場合にも考慮してほしいと思います。

谷元さんのお話は、同時代を生きたもの同士として、そうよね、そうだったわねと思いがら聞いていました。聞きながら改めて、私は集団やグループで行動したり、みんなで訴えるというのが不得意だったなあ。個人で行動することの方が性に合っていたから、運動よりもつくるほうに進んだのでしょね。あの時代は、多くの女性たちがそれぞれの場で女性の問題を考えながらちゃんとつながっていましたし、今も多くの女性たちのそういった動きを感じています。谷元さんが言われた、自立した個人と個人のつながりをめざすのがフェミニズムなんだという言葉をもっと多くの人に知って欲しいと思います。

阿部さんは、メディア社会の新しい発信の仕方としてジンをとりあげましたが、福山大学のジェンダー・ゼミでつくっているジンの「シオカラ」という呼び名はどんな意味があるのか聞きたいです。そして、ネット社会のいまこういうメディアが出回っているというのが実に興味深いですね。ブログのような要素もあるでしょうし、違いもあるでしょうね。リブ時代のミニコミは、運動の表現としてテーマが明確で、社会に訴えるメディアだったと言えます。たとえば「女エロス」のような。ジンにも、かつての運動を目的としたものがどの程度存在するのか、今後流布する可能性があるか興味があります。

青野さんの発表で、フェミニストの母と娘について言及がありました。私も「何を怖れる」でフェミニストたちにインタビューをしながら、お子さんを持つ方には母と子の関係を聞きましたが、その点ではあまり話が弾まなかったですね。映画に登場した現在 70 代のフェミニストたちは結婚せざるを得ない時代状況を生きてきた。でも、時代が違ったら非婚を選んだ人がもっといたのではないかと感じました。自分の生き方を貫こうとするフェミニストたちは、息子・娘は母親の不満や本音を聞かされることになります。きっと皆さん、それなりの葛藤があったと思いますが、夫との関係や子どもとの関係はなかなかうまく聞き出すことができなかつた。それが少し心残りです。青野さんはヤフー知恵袋の分析から、世間は中庸をいっているという感想をもたれたようですが、私も中庸をいく世間を描こうとしている監督かもしれないですね。

<sup>1</sup>本ラウンドテーブルの開催にあたり、科学研究費助成事業（学術研究助成基金補助金）（基盤研究（C））（課題番号：25380863 研究代表者：青野篤子）の助成を受けた。

## Roundtable : The succession of feminism

Atsuko Aono, Kazuki Iwamoto, Ayako Tanimoto, Jun Abe,  
and  
Hisako Matsui

The first author has researched the succession of egalitarian gender-role attitude from the previous generation to the present generation by using both quantitative and qualitative methods for the past few years. The previous generation who experienced the second wave of feminism tried to achieve one's own independence and social advancement. However, the successive generations who were born after the Equal Employment Act or the Basic Law for a Gender-Equal Society have gradually lost the affinity for feminism. On the other hand, it is said that the trend symbolized by "Joshikai" (gathering of women only) in which women try to get together, share their experiences, and change the situation around women, is similar to the climate in the second wave feminism. This roundtable was planned to discuss various aspects with the running of the film entitled "What are you afraid of?" which showed the life-styles of feminists during the second wave feminism in Japan.

keywords : feminism, feminist, women's liberation, gender equality